だより

R6.12.17　Vol.32

「〇〇です!」

先日、私たち教員の研修の時間、子供の発表の仕方について、I先生から「『〇〇!』と単語だけで発表するのではなく『〇〇です!』という言い方をきちんと指導していきましょう。」という提案がありました。I先生は1年生の担任をしており、楽しさと規律のバランスが取れた学級づくりを進めています。入学してからの1年生の様子を見ていますが、当初、右も左も分からなかった子供たちが、学校生活に徐々に慣れ、楽しく毎日を過ごしている姿に I 先生の学級づくりの確かさを感じています。

親ならば「我が子ファースト」がある意味、当然ですが、私たち教員は「この子ファースト」をすることは、これまた当然ながらできません。「みんなファースト」にしていくために「ならぬものはならぬのです」会津藩の教えよろしく規律も楽しさと同様、大切にしていきたいです。

伊勢海老食べました！

校長室に遊びに来る子供の一人が「校長先生！僕！昨日！伊勢海老食べたんです！」と満面の笑顔でやってきました。「わ！いいなあ！なんか特別な日やったの？」「違います。何かの工事をしていた人がお礼に！って持ってきてくれたんです！生きてました。」「そうなんか！それはごちそうやったな！」「はい！鯛やハマチも、もらいました！」「鯛にハマチに、まるで竜宮城やな。お礼を持ってきてくれた人は三崎かどっかの人なんかな？」「いえ！違います！大阪です！」「え？大阪から生きたまま？？」「あれ？あ！間違いました！大島でした。」二人で爆笑！

とりとめもない話ですが、そんな話をしたり、子供がウクレレを弾きにきたり、そんな子供たちとの雑談がとても楽しいです。

四方山話真穴 ver.　其の三十一（言葉の捉え方）

前号で物事の捉え方の話をしました。関連して言葉の捉え方の話を。昨今の社会を眺めていると、少々、言葉一つ一つに過敏になっている気がします。結果、「そこまで丁寧に言う必要あるのか？」「もう冗談も言えんな…。」そんな場面にも出くわします。そんな今の社会の風潮。とても窮屈だなと思います。

私が小学校２年生の時、漢字の勉強で**『市』**という字を習いました。担任の先生が「『よいち』ってどう書くか分かる？」と問われて、大勢の友達が、一年生のときに習った**『一』**を発表しました。私が「先生！新町を歩いていたら上の看板に『夜市』と書いていました。だから『一』じゃないです！」そう言いました。「あら！雅人君！よく知ってたね。いつもきょろきょろして落ち着きがなくて怒られてばっかりなのに、そのきょろきょろが役に立ったね。」そうおっしゃいました。これ！どうですか？きちんと正解を発表しているのに、いつも落ち着きがないとか、怒られてばっかりとか要ります？（笑）でも私はその先生が好きでしたし、笑顔でおっしゃられていたので、「いやあ～それほどでもぉ～」としんちゃんのごとく素直に喜んでいました。（単純ですね～。）

俳優の西田敏行さんが亡くなられましたね。追悼で、ある方が「虹の橋をわたった向こう側でも楽しんでほしい…」そう発言したことが物議を醸したとか。「虹の橋をわたる」とは、大切にしていたペットが亡くなった時によく使われる言葉だそうです。それを知って故意に使っていれば、「それはどうなの？」となりますが、哀悼の意をあらわしているのは前後の文脈で分かるんじゃないかな。叩かないといけないことなのかなあと感じました。

「昭和世代に通用しても今の時代はアウトだよ！」こんな耳の痛い言葉もよく聞きます。ハラスメント防止や正しい人権感覚を身に付けるために言葉を知ることは大切なことだと私も思います。が、行き過ぎる指摘は何も生まない気がします。言葉尻を捉えるのではなく、言葉の奥にあるその人の気持ちに思いを馳せてみる。そんな世の中になればいいなあと思います。